

井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

文化園賞：小倉三千彦



わたしと井の頭自然文化園

蝶は気ままに蜜を求めて花から花へと飛び回っているように見えますが、本当はそうでもないらしい。狙っていたアゲハチョウなどを採り逃がしてしまっても、しばらく待っていると同じような蝶が戻ってきます。何度もこうした体験を重ねると、蝶はいつもほとんど決まったルートを飛んでいることがわかります。このように蝶が飛ぶコースを蝶道(ちょうどう)と呼ぶそうです。

わたしも井の頭自然文化園の正門をくぐると、真っ先に迎えてくれるブロンズの「天女の舞」像に誘(いざな)われるように、点々と配置された彫刻を見ながら、今も武蔵野の面影を残す雑木林に包まれた彫刻園へと歩を進めます。「平和の女神」「若き日の信長」「怪傑日蓮」など、故・北村西望氏の作品を眺めながら中庭をはさんだ二棟の彫刻館やアトリエ館へと向かうのですが、この道はいつしか蝶道ならぬ私の「彫(ちょう)道(どう)」となっています。。西望氏は、彫刻園にある木造三角屋根のアトリエで長崎の「平和祈念像」を制作しました。アトリエ館の前では、ぶかぶかの軍靴を履き挙手の礼をする、あの愛らしい「將軍の孫」の像が出迎えてくれるので、いつ訪ねても心が和みます。

私は数年前に仕事を退いてから、よく井の頭自然文化園の彫刻園に通うようになりました。彫刻館に収められた西望氏の作品群の素晴らしさは言うまでもないが、私は野鳥のさえずりを耳にしながら、武蔵野の雑木林の明るい木もれ日を通して彫刻を身近に鑑賞できる緑の空間がことのほか気に入っており、勝手に「私のグリーン書斎」と呼んでいます。とくに厳つい鎧、兜を身にまとい、長い槍を携えた巨大な「加藤清正公」の像を見上げる位置のベンチにゆったりと身を預け、好きな本を読んだり、歴史上の彫刻の人物に思いをはせるひとは「極上の時間」を手に行っているようで、このうえない幸せな気持ちになれます。

グリーン書斎に通うようになって五年目になりますが、ここは季節によってさまざまな顔を見せてくれました。木々が一斉に芽吹く緑の時期には、彫刻たちもより生き生きと見え、また葉という葉をふり落とした冬枯れの雑木林の中や、新雪を体にまとった彫刻たちも、屋内では味わえぬ格別の趣があります。これからも足腰の立つ限り、彫道を通い、わたしのグリーン書斎で極上の時間を過ごしたいと願っていると、帰り際に白く輝く美しい阿弥陀三尊像が「まだまだ大丈夫、また来てくださいね」と私に微笑んでくれました。